商品に表わされた労働の二重性

中　尾　訓　生

一

「二節，商品に表わされた労働の二重性」の重要なることはマルクスが直接に語っているところから，われわれにとって周知のことであるが，[①] しかし多くの『資本論』の解釈者はマルクスの権威にしたがい重要であることは指摘するが，この節についてマルクス自身が語っているほどの重要な論理的位置を与えて解釈しているものはすくない。

この節を解釈するためには「一章，商品」の全体を視野に入れておくことが肝要である。私は「二節」が次節の価値形態論の展開にどのような役割を果しているのかに注意して解釈していきたい。

マルクスに従うならば「二節」は経済学の理解にとって決定的な跳躍点であるところの商品にふくまれている労働の二面的な性質が説明されそして，「三節」は「いまだかってブルジョア経済学によって試みられたことのない一事をなしとげようというのである。すなわちこの発生を証明するということ（『資本論』I 向坂訳62頁。以下『資』と略す）にあてられている。

私は「二節」の解釈を「商品に表わされた労働の二重性」という場合の，「表わされた (dargestellten)」とはいったいどういうことなのかということ

---

① 「僕の本の最良の点は，(1)（事実の理解がすべてこれにもとづいている）すぐ第一章で強調されているところの，使用価値に表現されるか交換価値に表現されるかにしたがっての労働の二面性，……」（『資本論にかんする手紙』上・岡崎訳・国民文庫・159頁）。

を念頭にすすめていくことにする。

なぜなら「二節」は労働の二重性については論ぜられているが「商品に表わされた労働の二重性」はとりあげられていないようにおもわれる。

「一節，商品の二要素，使用価値と価値（価値実体、価値の大きさ）」マルクスは外的対象物である商品を分析して価値の実体に到達するのであるが，この分析方法は有名なヴェームの批判に遭遇することになった。私はヴェームの批判に一部分同意する。マルクスの叙述（展開）は不充分であるとおもう。

ヴェームはマルクスの価値の実体を獲得する方法は，「あたかも，壺のなかから白球をとり出そうとせつに願っているひとが，壺のなかに白球だけを入れておいて確実にそうした結果を得ようとしているのとおなじ」[②]であるといっている。すなわち，マルクスは分析の結果，価値の実体（一般的抽象労働）を得たのではなく分析をはじめるまえにすでに信念としてそれを得ていたのであるという。

「われわれは二つの商品，例えば小麦と鉄とをとろう。その交換関係がどうであれ，この関係はつねに一つの方程式に表わすことができる。そこでは与えられた小麦量は，なんらかの量の鉄に等置される。例えば，1クォーター小麦＝aツェントネル鉄というふうに」（『資』48頁）

この表現は誤りではない。もともと二つの物が等しいということはそれらが置き換えできるということであるから，交換された（置き換えられた）ということを等号によって表現したのである。

さて問題はこれからである。

マルクスは得られた等式から「この等式は何を意味するか」と問い，次のように答える。「二つのことなった物に，すなわち，1クォーター小麦にも，同様にaツェントネル鉄にも同一大いさのある共通なものがあるということである。」小麦のなかに，鉄のなかに共通のあるものが存在しているということはいったいどういうことなのか。

---

② 『論争・マルクス経済学』玉野井・石垣訳，96頁。

いずれにしても，分析すべき対象は等号の内容であり，そしてそれは置き換えをした商品所持者のその行為であろう。

しかるに，マルクスはこの共通なるものを獲得するために，あたかも化学的試薬か顕微鏡でそれができるかのように外的対象物である商品を分析するのである。

しかし，よく注意してみるとこの分析を可能にしているのは交換行為を二つの要素に分離しているところにある。

交換がおこなわれるためには使用価値の相異こそが前提である。上衣と上衣とは決して交換されない。交換がおこなわれると，それはある量とある量とが交換されている。

交換行為のなかでは価値と使用価値は相即不離である。もちろん，マルクスはこのことは充分承知している。「三節」の価値形態論の要点は交換行為の内的構造を解明しているので交換行為を二つの要素に切り離したりはしない。それは使用価値と（交換）価値の統一によって成し遂げられている。承知していながら交換行為を二要素に分離して価値の実体に到達しようとする。すなわち，マルクスが使用価値の捨象をおこなったのは，交換比率をとりあげたところである。③

もし，小麦＝鉄という等式を成立させるために共通のあるものを獲得しようとするならば，その自然的属性からでも得られるであろう。

だから，「一節」での価値実体に到達する叙述はヴェームのいっているようにあたかも事前に投ぜられていた白球をとりだすかのような印象をあたえる。

したがって「一節」の叙述が後の展開と整合しているか，どうか，ということを本稿は念頭においておく必要がある。

---

③　「商品の交換関係をはっきりと特徴づけているものは，まさに商品の使用価値からの抽象である。この交換関係の内部においては，一つの使用価値は他の各使用価値と，それが適当の割合でありさえすれば，ちょうど同じだけのものとなる。」（『資』Ⅰ49頁）。

二

「二節」の冒頭で，マルクスは「商品に含まれている労働の二面的な性質は，私がはじめて批判的に証明したのである。この点が跳躍点であって，これをめぐって経済学の理解があるのであるから，この点はここでもっと詳細に吟味しなければならない」(『資』54頁）と述べている。たしかに，労働の二面的性質については論じられている。そして，また私達は「すべての労働は，一方において生理学的意味における人間労働力の支出である」「他方において，特殊な，目的の定まった形態における人間労働力の支出である。そしてこの具体的な有用労働の属性において，それは使用価値を生産する」(『資』61頁）という労働の二面的性質の規定もさしたる困難もなく了解できるであろう。

しかしながら，あちらの労働には，生理学的意味における人間労働力が支出されており，こちらの労働には，ある目的の定まった，特殊な労働力が支出されている，というのではなくして一つの労働が二重の性格において存し，しかも，それを商品のうちに認めることができる，ということを了解するには努力を要するであろう。

それなのに，「二節」では労働の二面的な性質が商品に含まれているということは自明とされているかのようである。

なぜであろうか。いうまでもなく，それは「一節」の商品分析を承けているからである。したがって「表わされた」ということの解釈は，「一節」での価値実体を獲得するための外的対象物である商品を分析した方法を検討するということになる。もともと問題は，価値実体を獲得するということの内部に，とりわけ読者にその道筋を明確に指示しようということのうちに存在する。その道筋を示す方法が，読者の常識に依拠しているなら，なんらの困難もなく読者はそれを了解することができるだろう。

マルクスは獲得された（商品に表わされた）労働の二重性でもって何を解明しようとしたのか。それは，われわれが日常生活において常識として受け入れている諸関係の再生構造であり，その転倒性の根拠である④。

換言すると，マルクスはブルジョア社会を構成しているわれわれの常識を対象化し，切開しようというのである。

そのための分析用具を常識にしたがった方法で提示する。したがって，この分析用具もシュムペータのそれと同じ性質のものであるとの印象をあたえるが，決定的な相違があることが後でわかるだろう。われわれは商品交換の内実について語るとき意図せずしてこれを二要素に分離してしまう。商品交換の役割（発生）と交換比率は同時に関連しているものでありながら，通常は分離して語られる。これが，「一節」における価値の実体を導出する方法なのである。

解明すべき対象とそのための分析用具の関係を私はいま，問題としておりそしてそれが「一節」「二節」を解釈する要点であるということである。

外的対象物である商品を分析して商品に表わされた労働の二重性を得るのであるが，この方法に納得するものも，ヴェームのように批判するものもこの点を問題にはしない。

逆説的にいうならば「一節」「二節」の展開をなんらの困難もなく了解できるものは，常識を対象化している「三節」を了解することが困難になるだろう。

価値実体をひきだすべき分析の対象は外的対象物である商品ではなくして交換行為である。そして得られた分析用具（商品に表わされた労働の二重性）は解明すべき対象と研究主体との間に介在するものであるばかりでなく研究主体（私達）でもあり，また当の対象でもある。

三

1859年に世に出た『経済学批判』（武田・大内訳，岩波文庫，以下『批判』

---

④　マックス・ヴェーバーが『フランクリン自伝』に資本主義社会のエートスを読みとっているように，マルクスはシェークスピアの『アゼンスのタイモン』に，この社会の本来的性格を読みとった。マルクスが念頭に浮かべていた諸関係が具体的にどのようなものであるのかを知るには『アゼンスのタイモン』を参照のこと。

と略す）の「一章，商品」の後半に「A，商品の分析のための史的考察」（以下「A」と略す）がある。冒頭，マルクスは次のように述べている。「商品を分析して二重の形態の労働に帰すること，つまり使用価値を現実の労働または合目的的な生産的活動に帰し，交換価値を労働時間または同質の社会的労働に帰することは，イギリスではウィリアム・ペティ，フランスではボアギュベールにはじまり，イギリスではリカード，フランスではシスモンディにおわる古典派経済学の一世紀半以上にわたる諸研究の批判的な成果である」(57頁『批判』)。マルクスは諸学説にみられる商品を分析して二重の形態の労働のもとにそれらが整理できるといっている。

『批判』の「一章」前半部分では，後に『資本論』で再現することになる外的対象物である商品を分析して労働の二重性を得る展開がみられる。

したがって，「A」はかくして得られた労働の二重性でもって諸学説を整理したにすぎないのであって，「商品論」の展開にとってはたんなる傍証の位置にあるにすぎないということになるのであろうか。

たしかに『批判』での「A」の位置はそのように判断させる。

しかし，『資本論』「一章」の「二節」のすでに引用している冒頭の叙述と「A」の冒頭のそれに照応関係があるように私はおもえる。

「商品に表わされた」ということの内容を解く鍵は「A」にあるようにおもえる。

「A」の検討に入る。

マルクスの彼らにたいする評注が正しいかどうかの検討はここではひとまずおいて評注の枠組を摘出することにする。

マルクスはペティとボアギュベールの理論の対照的性格を労働の二重性によって簡潔にあたえている。

(一)　「かれ（ペティ）のばあいは，労働を素材的富の源泉として認識したからといって，労働が交換価値の源泉であるような一定の社会的形態についても認識をあやまることはないとするわけにはゆかない，という実例をはっきりとしめしている」（58頁傍点引用者）

(二)　「ボアギュベールは商品の交換価値に対象化され，時間ではかられる労働を，個人の直接の自然的活動と混同しながらも，労働時間は商品価値の大きさの尺度としてとりあつかわれるものだということを，われわれに証明している」(61頁傍点引用者)

I　ペティは素材的富の源泉は（現実）労働であると認識したが，対象の歴史把握には失敗した。すなわち，労働が交換価値の源泉となるような一定の社会形態についての認識はあやまった。対象の歴史的把握をあやまっているとしたマルクスの根拠はペティが「(貨幣)金銀をうるという特定の種類の現実の労働を交換価値をうみだす労働」としたところにある。しかし，このあやまりはペティの観察眼の貧しさを示すものではなくして，逆に事実をそのまま受け入れた鋭さを示している。そして，これにはステュアートの理論を評した次の部分がそのままあてはまる。

「彼（ステュアート）にあっては経済学の抽象的諸範疇はまだそれらの質料的内容から分離する過程にあり，したがってこの両者が互に融けあって曖昧になっている」(65頁)

したがって，彼らの理論における抽象的諸範疇の未成熟は彼らの責任ではない。

マルクスはペティ，ステュアート，スミス，リカードへの理論的流れを投下労働価値説が純化していく過程として，換言すると質料的なるものとの未分離を示している現実的労働が抽象的労働へ発展していく量的規定の純化過程としてみる。

複雑労働の単純労働への還元という抽象も日常それがなされているからこそ、われわれはおこなうことができるとマルクスはいう。

もちろん，諸労働の単純ないわば質をもたない労働への遷元という社会的現実から労働時間による交換価値の規定を誰もが導出するというのではない。

マルクスは，「A」ではそのような人の（例えば，トーマス・マルサス）説はとりあげていない。これは注意しておいてもらいたい。[5]

さて,「商品を分析して……使用価値を現実の労働または合目的的な生産活動に帰し」(57頁)と述べているのであるが,「現実の労働(Arbeit)」と「合目的的な生産活動(Tätigkeit)」とは,同じなのか,それとも,違っているものとして使用されているのか,ということを確かめる必要がある。「A」を検討するためにはぜひとも必要である。

諸学説にたいする評注のなかでマルクスは「現実の労働」という用語は使用していても「合目的的な生産活動」という用語は使用していない。ただし「自然的な活動」という用語をボアギュベールにあたえた評注のなかでみることができる。私は「自然的な活動」と「合目的的な活動」という用語は同じような論理的役割をはたしていると考えている。

このことは,これから説明していくつもりである。「現実の労働」と「合目的的な生産活動」とは,ともに使用価値に結実する労働(活動)ということであるが,重要なことは評注の枠組の構成において前者が即自的にとらえられているのにたいして,後者は対目的なそれであるということである。マルクス自身は「一章」の「A」より前の部分では使用価値に結実する労働は「合目的的活動」としてか「具体的な特定の労働」としている⑥。

マルクスに依ると,フランクリンは現実的労働と交換価値に対象化された労働を混同しているという。

この混同はしたがって,現実の生産物の交換価値への転化を自明のこととする点にあらわれる⑦。

日常,仕事場,農場等で人が目にする労働の即自的表象としての「現実の

---

⑤　リカードとマルサスはマルクスによって前者は古典派経済学の完成者であり,後者は,俗流経済学を奉ずるものとされている。

しかしマルクスによるこの区別は両者が交わした論争から直接にひきだすことは困難である。なぜなら,彼らは共通の土俵(次元)で論争をおこなっており,その論争の正否はその次元で決着されるであろうが,マルクスは異なった次元からその論点の解釈に入っているのである。したがって,その区別の根拠は論争点の次元から別の次元に求めざるを得なくなる。

⑥　『批判』の37頁で「特定の現実の労働」という用語が使用されている。この場合,「具体的労働」と区別されているのかどうか,については,よくわからない。

労働」と特殊社会的労働である交換価値に対象化される労働との混同は，（混同といっても，「現実の労働」と「交換価値に対象化される労働」とは同一の労働である。念のために）労働から社会の歴史把握を追求しているマルクスからすれば当然のことながらこれは，歴史把握の欠如を示している。

古典派経済学の完成者としてのリカードもまたマルクスからみると「リカードは労働のブルジョア的形態を社会的労働の永遠の自然形態だとみなしている」(69 頁）ということであって，当の社会の歴史把握に失敗している。リカードは富と価値を厳密に区別し，そして，量の問題だけに関心を集中することによって,，その理論から使用価値に結実する現実的労働を排除した。

リカードにおける歴史把握の欠如はフランクリンのそれとは異っている。

これはマルクスが引用している次の言葉に適確に表現されている。

『リカード君は他の遊星から落ちてきた人のようであった』(70 頁）

マルクスに依るとリカード理論はあまりにもするどくブルジョア経済を解剖しているので，当の社会にいる人には異質の世界を描いているかのような印象をあたえているというのである。⑧ しかし，フランクリンの説はそのような印象を人にあたえないということをマルクスはよく知っている。

マルクスの歴史認識の構造は両者のこの差異，そして両者における歴史把握の欠如という規定から読みとることができる。

マルクスがリカード理論を決定的に克服したのはリカードが逢着した困難

---

⑦　『商業は一般に労働と労働との交換にほかならないのだから，あらゆるものの価値は労働によってもっとも正しく評価される。』とかれ（フランクリン）はいう。このばあい，労働というかわりに現実的労働という言葉をおきかえると，ひとつの形態の（現実）労働とほかの形態の（交換価値に対象化される）労働とが混同されていることがただちに発見されるであろう。」(63 頁，括弧・引用者)。

商業（分業）の役割の説明は現実的労働によって，交換比率（価値の尺度）の説明については価値に対象化される労働，（抽象的労働）によってなされる。

⑧　1844 年頃，マルクスが経済学を学びはじめたとき，マルクスはリカード理論のあまりの露骨さに驚きながらも評価しながら，しかも不満をもっていた。

それは，リカードによって「国民経済学の抽象化は汚辱の極に達した」(『マルクス・経済学ノート』杉原・重田訳 59 頁）といっているようにリカード理論では人間が非人間的に扱われている点である。

を解決[9]したところにのみあるのではなくして何故それが異質の世界を描いているかのような印象を人にあたえているのか，ということを解明したところにある。

付言するとリカード理論の克服・吸収はそれを基準に現実をさらに解釈しようとして遂行されたのではなくして，逆にそれを異質と感じた側（現実）にその克服の因を求めることによってなされた。

マルクスはリカードをブルジョア社会の内奥をとらえたとして高く評価するのであるが，その克服の因はその内奥を提示され，それに畏怖の念を抱いた人びとの側に求めた。

ペティの「現実の労働（金・銀をうるという労働）」は，「交換価値に対象化された労働」としてリカード理論に結果するとマルクスは読みとるのであるがもう一つの要素を彼らが使用している用語，「現実の労働」のうちにみてとった。これが，いうまでもなく克服の因となる。

ボアギュベールにあたえた評注の検討に入る。

㈡を読み返してほしい。

「交換価値に対象化された労働」を「諸個人の直接的な自然的な活動」と混同しているとマルクスはいう。

マルクスに依るとボアギュベールは「ある形態でのブルジョア的労働（交換価値に対象化された労働）を空想家的に美化」（括弧は引用者）する，そしてそれは当の社会を調和ある使用価値の享受という目的を達する自然にかなった社会形態だとみなしているからであるという。そうであるが故に使用価値の調和ある享受を混乱させる「ほかの形態でそれ（貨幣に対象化された労働）に憤激する。」（括弧は引用者）

マルクスが強調していることは「憤激する」のはボアギュベールの個人的性向によるのではなくして人間に本来的に備わっている性向に依っていると

---

⑨　マルクスはリカード理論に向って集中した論争点を四点に要約している（『批判』71～73頁）。これら四点にマルクスは決着をつけた。「労働」と「労働力」を区別することによって。そして，生産価格論と地代論で。

いうことである。「諸個人の直接的な自然的な活動」によってボアギュベールは貨幣をすなわち，「盲目的破壊的な黄金欲」を攻撃したのである。

「自然的な活動」という用語が果している論理的役割の輪郭が浮かびあがってきたようにおもわれる。

「交換価値を生みだす労働を特徴づけるものは人と人との社会的関連がいわばあべこべに，いいかえれば物と物との社会関係として表示される点にある。」(31頁)とマルクスは述べているが「物と物との社会関係」にボアギュベールが憤激したのは「交換価値を生みだす労働」と「自然的な活動」を混同したが故であるとマルクスは解する。

「交換価値を生みだす労働」と「現実的労働」とが混同されているというフランクリンにあっては,「貨幣は技術的な便宜のために外から交換のなかにもちこまれた用具」とされている。

現実に労働が使用価値に結実することを目的としていることは誰でもが知っている。

そしてまた当の社会にあってその使用価値を直接に享受することはできないということも人は感じている。

ペティ，フランクリンの終局に位置すると解されているすなわち，先行者の論理なかではその役割を果した「現実的労働」という用語は姿を消してしまっているリカードの理論はしたがって人間の主体的活動によっては使用価値の享受の機構は変えることができないことを示している。

リカードにとって現実におこなわれている労働は時間によってのみ評価される労働，すなわち，価値に対象化される労働である。

このようにリカード理論における主体（人間）は当の社会（対象）によって全く規定されているのにたいしてボアギュベールのそれにおける主体は，「自然的活動」と「交換価値に対象化される労働」とを混同しているという評注から判断して当の社会にたいして能動的に働きかけるものとしてある。

前述したマルクスのリカード理論の克服・吸収は，すなわちマルクスの歴史把握はボアギュベールにあたえた評注で示されているところの「自然的活

動」を自己の論理としてとり込むことによってなされた。

リカード的な認識，ボアギュベール的なそれ，どちらが正しくて，どちらが誤りであるのか，ということをマルクスは判定しているのではない。両方の認識方法が存在しているという事実に注目したのである。⑩

このような二重の認識方法の統一こそが『批判』と『資本論』とを分かつ決定的なところである。「価値形態論」の完成がそれを示している。

---

⑩　私は「現実の労働」(reale Arbeit) の規定を解釈するさいの要点は即目的というところにあるとしたが，ステュアートにあたえた評注で使用されている「現実の労働」という用語は「使用価値を目的とする」という点が要点である。

私達は現実におこなわれている労働を観察してそれが使用価値に結実するということは即目的に思いうかべることができるであろう。しかし，ここでは，かかる意味で「使用価値を目的とする」というのではない。ステュアートにあたえた評注を検討する際，このことに注意する必要がある。

なぜなら，マルクスにあっては「現実の労働」という意味はステュアートの場合も他と同様に差異はないとされているから。

ステュアートにたいしてマルクスは次のように述べている。

(1)　「経済学の抽象的カテゴリーは，またその素材的内容から分離する過程にあり……」　(2)　「ステュアートがその先行者や後継者からぬきんでていた点は，交換価値に表示される特殊社会的労働と，使用価値を目的とする現実の労働とをはっきり区別した点である。『その脱却によって一般的等価物を創造する労働を，わたしは勤労 (industry) とよぶ。』とステュアートはいう。かれは勤労としての労働を現実の労働から区別するばかりでなく　(3)　労働のほかの社会的形態からも区別する。それは，かれによれば，労働の古代的および中世的形態に対立する労働のブルジョア的形態なのである。とくにかれが関心をもっていたのは，ブルジョア的労働と封建的労働との対立であり……」(66頁・番号引用者)。

マルクスの評注，(2)，(3)は明らかに別の事柄であるように判断される。

(2)では，特殊社会的労働（ステュアートの表現で勤労）と現実の労働の区別，

(3)では，ブルジョア的労働とほかの社会形態のそれ（例えば，封建的労働）。

しかし，私は，(2)での現実の労働でもってマルクスが意味したところのものを解釈できない。

なぜなら，(2)でマルクスが解釈したような区別をステュアートがしているならば，(1)であたえたようなことは生じないであろう。素材的内容に眩惑されて価値の量的規定を誤ることはないであろう。

マルクスを離れてステュアートに直接聞いてみよう。

彼は勤労（価値に対象化される労働）とレイバー (labour) を区別している。

勤労は自己の欲望を充足させるために自発的におこなわれるのであるが，レイバーは

強制された労働である。勤労はトレード (trade) によって，あらゆる欲望に応える等価物（貨幣）を得るための，したがって自由人 (a free man) の器用なる労働である。

勤労はトレードなしには遂行されないが，レイバーはトレードが存在しない状況でなされる。(『Political Economy』J. Steuart Vol. I P. 166)。

レイバーは自給自足の経済のもとでの労働であり，かかる意味での「使用価値を目的とする」労働である。したがって，マルクスがペティやフランクリンにあたえた評注において使用している「現実の使働」とは，レイバーは異っている。ペティやフランクリンの場合における「現実の労働」は「価値に対象化される労働」（勤労）でもあったのである。

ステュアートのレイバーと勤労とは異った二つの存在なのである。

したがって，レイバーと勤労との区別は，(3)でのそれが適確であり，(2)でのそれは，(3)によって充分である。マルクスが，(2)と(3)を区別した理由がよくわからない。

それともマルクスはステュアートが労働の二重性を把握していたと主張しているのであろうか。本稿では，私は，(2)の意味は(3)のことであると解釈している。

マルクスが『資本論』の「価値形態論」で充分に展開している歴史認識，つまり「価値形態論」で設定された対象（当の社会）の歴史性はステュアートのそれとは異っている。ステュアートは自給自足の社会との比較によってブルジョア社会の特質を摘出したのである。

マルクスにおける対象の歴史性を設定するさいの理論上の困難は，例えば，アダム・スミスにあたえた評注においてみることができる。

「現実的労働から交換価値を生みだす労働，つまり基本形態におけるブルジョア的労働への移行をかれは分業によって成就しようとしている。ところが私的交換が分業を前提としているというのはたしかに正しいが，分業が私的交換を前提としているというのはまちがいである。」(68 頁)。

現実的労働によって分業の役割を説明し，分業の役割から「交換価値を生みだす労働」をひきだすというスミスの方法をマルクスは批判しているのであるが，このような誤りはスミスに固有のものではない。フランクリンもまたそうであったということは既にみたとうりである。この誤りは，分業が多様な労働様式をふくんでいる諸使用価値の多様さという形で観察されるところから生じてくる。

それではマルクスはこの誤りにどのような解答をあたえたか。

「交換価値を生みだす労働」は，1クォーター小麦＝aツェントネル鉄，という等式からこの等式を成立させる共通なものとして導出された。マルクスのスミス批判と比べてみるならば，小麦と鉄の交換を私的交換としている点がスミスと異なる。それでは私的交換はどのように規定されるのか。マルクスにこのように問うことはマルクス自身が対象（当の社会）の歴史性の設定をどのようにしているかを問うことである。

この点については『批判』と『資本論』とでは異なっている。拙稿「価値形態論の形成」。

「価値形態論の構造」(22 巻5・6号)(23 巻1・2号) を参照されたい。

四

「商品に表わされた労働の二重性」の解釈に入る。要点は「表わされた」ということは，どういうことなのかということである。[11]

「A」でマルクスは彼らの歴史把握の失敗を明らかにしてきた。それは「商品」について彼らが語っているときに使用された用語，「労働」の性格を分析することによってなされた。マルクスは，対象の歴史性の把握に関して二様の認識（思考）方法が存在していることを指摘した。それは「商品」を二重の形態の労働，すなわち，「現実の労働」と「同質の社会的労働」に帰することができると叙述された。そして，どちらの方法に依拠するにせよ，その結果は，彼ら（研究主体）と彼らが設定した課題との関連にたいする考察は生ずる余地はなく，したがって研究の対象はきわめて恣意的に設定される。

---

⑪　「二節」での労働の二重性を理解することは，商品交換が全面的に発展しているという事実を背景としている私達には困難なことではない。しかし「二節」の要点である「商品に表わされた」労働の二重性を「二節」で読みとることは困難である。多くのマルクス解釈者はこの点で躓いているようにおもう。正木八郎氏の「商品論と抽象的人間労働」（『現代思想』所収 1975，臨時増刊）296～299 頁を参照されたし。正木氏がこの論文で主張されていることは以下のようである。「資本論，一章商品論に固有の課題は次のことにあると考えられる。すなわち，すべての成員が私的生産者にして商品所有者として登場し『自由・平等・所有そしてベンサム』という標語によって特徴づけられるブルジョア社会の表面から必然的に生じる自立化あるいは，自己労働に基づく所有という仮象をイデオロギー的基盤とし，ブルジョア的生産様式を社会的生産の永遠の自然形態と見誤った古典派への批判という課題である。そしてこの一章のなかにあって抽象的人間労働というカテゴリーこそはこの「表面」からの悟性的反映として特徴づけられた古典派の価値実体論に対する批判という意味をもち，したがってまずそのカテゴリーのなかに古典派の方法への批判とそのイデオロギー的基盤の解明が準備されていると理解することができるのである。」（315 頁）。

このように主張される氏の展開をこれからみてみよう。

「一節」でマルクスは古典派と同じ分析的方法（貨幣を捨象した諸商品の交換関係をとりあげ，それから使用価値を捨象する）で価値の実体を抽象的人間労働として把握した。

価値形態論を展開することができなかった古典派の方法を意識的に採用しているのは，これを批判するためであった。

何故，批判するのか。「分析的方法が資本制生産様式が永遠の自然形態であるという観念と決して無関係ではないということを意味する」から。（305 頁）

すなわち，対象の発生ということは考察の外におかれる。

彼らはそれぞれの課題にしたがい，あるときは「現実の労働」をあるときは「同質の社会的労働」の用語をそれ自体は深く吟味することなしにその課題に応えるために使用したのである。

価値実体をひきだすべき対象は外的対象物としての商品ではなくして交換行為であると私は主張し，マルクスの「一節」の展開に疑問をだした。価値の実体，すなわち日常幾百万回となく繰りかえされる交換から共通のあるものを導出し，それでもって商品交換の歴史的性格を設定すべきだと主張した。

しかし「A」の検討を通して得られたものによってあらためて「一節」にたいして「二節」，「三節」への論理整合性をもたせる解釈を試みてみよう。

「一節」には一般に価値の量的規定といわれている部分(『資本論』I 50～51

氏は古典派が資本制生産様式を永遠の自然形態と錯覚したということを次のような事例から説明しておられる。

古典派が「社会の初期の段階」に諸商品の交換関係の舞台を求めて，投下労働価値説を適用させているところから。したがって古典派とはスミスであり，リカードであるのだが。

それでは「古典派の分析的方法」と永遠の自然形態という観念とはどこで関係しているのか。氏は結局のところ両者の関係を両者がともに商品交換に立脚しているという点に求めている。すなわち，商品交換（＝等価物交換）は自己労働に基づく所有という仮象を生みだし，この仮象を背景として古典派の分析方法は存立しているというのである。（305頁）

したがって，この点を明確化することは当然，氏の解釈するマルクスにとっては必要となる。

氏は述べている。「一節における価値実体の導出に至る展開のなかでは悟性が分析主体として抽象を行なうという形をとっているが，しかし同時にそこでは，この悟性による抽象化がじつは客観的過程そのものによる抽象化の追認にすぎないことが事実上示されているのであり，このことのなかに悟性の運動＝分析方法の相対化というマルクスの立場が現われているのである。」（307頁）具体的には抽象的人間労働の規定（『資本論』I 49～50頁）のうちに古典派の分析方法の相対化を読みとることができるという。

マルクスは古典派の分析方法でもって価値の実体を抽象的人間労働として把握した。

そして氏に拠ると抽象的人間労働の規定のうちに，私達はこの分析方法の相対化・対自化の要因を読むことができる。

氏は抽象的人間労働の規定は商品世界の枠内で規定されているという点に注意を促している。（309頁）これは，さらに積極的に次のように主張される。「諸商品の交換関係と

頁）がある。

それは商品交換が全面的に発展していることを示唆するものと解される。

マルクスはそれを価値の実体を人間の頭脳にいやおうなく反映させる具体的現実として述べているようにおもわれる。

換言すると，このような具体的現実を背景として人はすでに無意識的に価値の実体を同質の労働として把握しているのではないかと主張しているようにおもえる。

だから，その把握の道筋は（価値実体の認識方法として正しいのかどうかは別問題）きわめて常識的に提示されたのだろう。したがってもし「一節」の叙述に固執するならば，ヴェームの批判に対しては商品交換者のこの無意識的な価値実体の把握（受容）の構造を明示すべきであろう。

使用価値の捨象から出発して，分析・抽出された抽象的人間労働は，この交換関係において成立する社会的関係のなかでのみ妥当するカテゴリーである。」(311頁）かくして，獲得された価値の実体は初期未開の状態に適用することはできないと氏は主張されるのかもしれない。しかし，スミスやリカードはマルクスの価値概念を使用しているわけではないのであって，もし氏がそのように主張されるならば，古典派経済学における「労働」についての説明を私達にあたえるべきだろう。

さらに，商品交換から抽出されたカテゴリーが初期未開の状態に，あるいは資本主義社会以外の社会に何故，使用することができないのかを説明すべきである。

そしてまた，抽象的労働というカテゴリーで古典派の方法を相対化・対自化し得たと氏は主張されているのであるが，このことも古典派の労働というカテゴリーの説明が求められる。

私にとって氏の展開を解釈することの困難は次のところにあるようにおもわれる。

古典派もマルクスも商品交換から価値の実体を抽出した。前者も後者も同じ方法でもって。しかし，前者はたんなる労働，後者は抽象的人間労働（たんなる労働というカテゴリーは抽象的人間労働と生産過程における生きた労働との間の位相の差異が見失われている。312頁）を導出したのであるが，この差はどこから生じたのか，氏は詳しい説明をあたえていない。

次のように述べている。「資本制生産様式の歴史性をすでに認識していたマルクスは……この分析方法を相対化することができた」(306頁）と。しかし，この歴史認識が如何なるものなのか，この論文では私達はそれを読むことはできない。

最後に，もう一つ私にとって解釈するに困難な点，「古典派が貨幣を媒介とした日常の交換を眼前に置きながら，それを貨幣を捨象した諸商品の交換関係へと抽象し，価値実体としての労働を導出することができたのは，交換当事者の日常的意識からではなく，

「A」でみたように交換を二つの要素に分離して価値の実体を把握する方法は（「一節」での分析方法）スミスやフランクリンが無意識的に採用している方法である。もちろん，マルクスはスミスやフランクリンにかぎらず，マルクスが検討した人々の把握方法はそのようなものであると解している。

なぜなら，分業が直接に表示される形態は多様な労働様式をふくんでいる諸使用価値の多様さとしてであるから。彼らは直接に表示された分業の各側面を都合よく切りとって表現したにすぎない。かかる方法の欠陥は（注の13を参照)歴史規定の欠如としてあらわれる。このような直接に表示される形態の内奥につきすすんで分業の歴史的性格を摘出したのはマルクスだけであった。「一節」でこのような常識的方法が展開されるゆえんは「三節」で解明されるべきことを明示したということにある。

交換行為そのもの，したがってそこに成立する交換関係から出発したからである」と，氏は述べておられるが，交換者の日常意識と交換行為はいったいどのようにして分離できるのだろうか，氏はマルクスの以下のパラグラフによって上述の事柄を説明している。「人間が彼らの労働生産物を互いに価値として関係させるのは，これらの物が彼らにとっては一様な人間労働の単に物的な外皮として認められるからではない。逆である。彼らは，彼らの異種の諸生産物を互いに交換において価値として等置することによって，彼らのいろいろに違った労働を互いに人間労働として等置するのである。彼らはそれを知ってはいないが，しかしそれを行なうのである。」(303頁傍点，正木)

古典派は無意識的に価値の実体を把握したと氏はいわれているのだろうか。

氏は次のようにも述べておられる。

「古典派が価値実体論で使用価値を捨象したのも，じつは現実の交換行為そのものが生み出す抽象化の運動の直接的反映なのである。」(304頁)古典派は価値の実体を把握するためには意識的作業は必要としなかったということなのだろうか

私もまた本稿で「一節」の価値実体を把握する方法は常識的な私達になじみ深いものであると説明してきた。

それは，交換行為を二つの要素に分けて考察するということであった。

それは，交換をおこなう動機は使用価値の差異によって説明し，交換比率を問題とするときは，使用価値は背後にしりぞき，共通の実体を探するということである。交換という一つの行為を課題に応じて分解して説明する仕方を私は常識的な方法であるといっている。

個々の課題はそれで説明されるであろうが，それら説明された課題を集合させても交換行為は説明できないのである。

マルクスが「A」で得たものは「一節」で展開されている方法を一転させるものである。かくして「二節」は「一節」での常識的認識方法を一転させる「三節」への橋渡しとなっている。

「商品を分析して二重の形態の労働に帰すること」とは認識の二様の存在を指摘しているものであった。「二節」においてマルクスは二重の形態の労働は商品に表わされていると主張した。かくして私は「表わされている」ということの意味を「A」の検討を通して次のように解釈する。

二様の認識方法が存在していたということ，（Xがxという認識方法を有し，Yがyという認識方法を有している。）が認識方法の二重性として（Xはxのみならずyを有している，Yはyのみならずxを有している。），あらためてとらえられたのである。

彼らのうちのあるもの達にとっては使用価値に結実する労働，「現実の労働」だけが存在し，他のもの達は「同質の労働」だけが存在していると解した。

マルクスにあっては「現実の労働」が課題に応じて二重の形態をとって現象すると，とらえられたのである。「労働」を基礎にして当の社会の歴史把握を試みているマルクスにあってはその概念は通常，解釈されている以上に広い意味をもっていると私は解釈している。それでは，商品に表わされた(1)，抽象的に人間的な労働と，(2)，具体的有用労働，によって指示されているものは何か。⑫

いうまでもなく商品交換をおこなっている「私達」である。したがって「三

---

⑫　現象と区別された本質（『資』IIIの二，1021頁）をマルクスは如何にしてみることができたのだろうか。何故，商品世界の物神性に眩惑されなかったのだろうか，このような他と決定的に区別される諸点をマルクスはどのように論理づけているのであろうか。

このような問いは現実（恐慌）が粉砕してしまうということが彼の答えだろうか。いずれにしても，彼はこれらの問いにはっきりとした解答は残していない。私は現代における解答の鍵は「労働」概念の豊富化のなかにあるようにおもう。中村尚司氏の「労働過程と歴史理論」（『現代思想』所収1975年12月，臨時増刊）における合目的な活動である労働（263頁）の解釈は興味深い。

節」において解明すべき対象として設定されたのは物象化された「私達」である。これによって当の社会の歴史性の中味はあくまで「私達」を基底にして充塡されていくことになる。

かくして「何事も初めがむずかしい，ということはすべての科学にあてはまる。」とマルクスは『資本論』の序文に記すことができた。

マルクスが抱きつづけていた問題は，ここに至ってはっきりとした形で提起された。⑬

この初めの困難とは，いうまでもなく解明すべき対象を設定することである。

いまや，それは次のようにあたえられる。

xがYによる設定を批判し，yがXによる設定を批判する。

---

⑬　マルクスが「経済学」の研究に着手したとき問題にしたことは何であったのだろうか。『経済学ノート』（重田・杉原訳）を読んでみて，私は彼の「経済学」にたいする接しかたに異質のものを感じた。それは彼が彼ら（先行の諸理論家達）の研究していることの内部に立入る前にその入口で立ちどまり，その内部にあるものを外側から点検する態度にである。

「非常にこっけいなのは，スミスがやっている証明の中にある循環論法だ。分業を説明するために，彼は交換を前提する。だが交換が可能であるために，彼はあらかじめ分業を人間の活動の相異を前提しなければならない。問題を原始状態にうつしたところで彼はそれから脱していない。」（『ノート』40頁）分業の発生を説明した部分にたいする評注である。

これはプルードンの交換価値の発生を説明した部分にあたえた評注と同じ類のものであるだろう。「プルードン君の仮定しているような欲望はそれ自身全分業を仮定している。分業を仮定するなら，そこには交換が存在し，従って又交換価値が存在する。それなら，初めから交換価値を仮定したのと違わない。」（『哲学の貧困』14頁，山村訳）。

彼はスミスやプルードンの内部に立入ろうとしている自分を点検している。分業や交換価値の発生を説明している彼らの方法を問題せずにして彼らの後に従うならば彼らの人間を承認することになるということを彼は感じている。彼はプルードンの交換価値を生みだす人間を批判している。「或る人の一時間が或る他の人の一時間とその価値が等しいというべきでなく，むしろ一時間の或る人が一時間の或る他の人と価値が等しいというべきなのである。時間が総てであって人はもはや何物でもない。」（『哲学の貧因』44頁）。

『貧困』の段階と『ノート』の段階との間における差についてはここでは問わない。むしろ，両段階の評注に共通しているものを問題にしている。

一層，直接的に人間について語られている部分を示しておこう。

あらためて述べる必要もないであろうが，確認しておくと，Xを抽象的人間労働によって表わされた「私達」とすると，xはその「私達」の認識方法を示し，Yを具体的有用労働によって表わされた「私達」とすると，yはその「私達」の認識方法を示す。

そして，Xの「私達」やYの「私達」はそもそも存在しない，現実に存在しているのはXとYで表わされた「私達」であるということを認識した結果が「二節」の「表わされた」という表現となったのである。

「初めの困難」は，したがってXとYで表わされた「私達」を設定することで克服される。XやYの内実は「労働過程と価値増殖過程」であたえられるが，ここでは，それらは「私達」の受動（拘束）性と能動（創造）性を示している。

それらは商品生産の諸関係の中に囚われている「私達」とこの諸関係を打破しようとする「私達」を示す。

「国民経済学的な観点に立てばリカードの命題は正当であり筋がとおっている。シスモンディとセーが国民経済学の非人間的な結論とたたかうためには国民経済学から外へとび出さねばならないということは国民経済学にとって何を意味するだろうか。人間的なものは国民経済学の外にあり，非人間的なものがその内にあることを意味するにほかならない。」(『ノート』61頁）彼は二様の人間について語っている。すなわちリカードの皮肉な表現に憤激し，国民経済学の外にとび出る人間とリカードによって描き出された人間。

彼は「経済学」の内に人間を探求している。このことは明確な論理の裏打ちによってされているのではなくして，逆に探求することによって彼は自己の論理を形成している。

そして，これの結論としては，実は人間の探求は「経済学」の最初の言葉の探求であったということである。

私はここで『ノート』を詳細に検討するつもりはない，ただ本稿で明らかにした「初めの困難」は「経済学」の研究に着手したときすでに内包されていたものが，形をととのえて提出されたということを指摘するだけである。